

## 理学部オープンキャンパス 2010 報告

理学部オープンキャンパス実行委員長  
藤森 淳 (物理学専攻 教授)

本郷地区の東京大学オープンキャンパスが2010年8月4日に開催され、理学部も参加した。日本全国が記録的な猛暑に見舞われる中、オープンキャンパス当日も暑い一日であったが、理学部にとっては暑い一日でもあった。キャンパスには9時前から高校生が集まり始め、理学部では受付開始を予定より早めた。理学部受付にはその後も次々と参加者が訪れ、最終的には昨年の3300人を大幅に上回る新記録4000人が達成された。オープンキャンパス本郷地区の参加者が全体で10000人弱であったのを考えると、理学部が圧倒的に盛況であったことがわかる。

今年のキャッチコピーは、理学部内で募り採用された「きになる理学」で、理学が「気になる」、「基になる」、「木になる」を掛けた秀逸作であった。ピンク色のTシャツに白い文字で「きになる理学」と書かれた「ユニフォーム」を着たスタッフと学生が4000人の参加者を迎えた(図1)。多くの参加者を短時間にスムーズに受け入れるため、受付、誘導は毎年工夫と改良がなされてきたが、今年はディズニーランドにヒントを得て、必要な情報がA4紙1枚の裏表に凝縮された「展示&ラボツアーマップ」、「講演会マップ」が用意され、効率的であった。各展示室、ラボには次々と見学者が訪れ、各講演会場は早々に満員となっていた(図2)。各学科が開設した「相談・質問コーナー」には熱心な高校生や駒場生が、一昨年から男女共同参画委員会が企画している「リガクル♥ミラクル - 女子中高生のための相

談コーナー」にも熱心な女子中高生が次々と訪れていた(図3)。

毎年好評を博している「学生による小柴ホール講演会」は、ホールの収容人数をはるかに越え、急遽ホール前のテレビ・モニター画面で見られるようにした。2人の講演者の夢のある話が聴衆を惹き付けるとともに、講演者と学生ファシリテータ(同時に登壇し、講演者に随時質問やコメントを述べる役)との掛け合いが和やかな雰囲気をつくり出し、難しくなりがちな講演内容をわかり易く伝えていた(図4)。特別企画の「学部・学科はどうやって選ぶ? 理学部にしかできないこと」は、オープンキャンパスを訪れる高校生や駒場生の最大の関心事である将来の進路とそれを見据えた学部・学科選びについて、これまで理学部以外の学部にも籍をおかれたことのある3人の先生方にご講演いただいた。東京大学の学部・学科の仕組みや、その中で理学部を選ぶことの意義についての説明に、皆が真剣に聞き入っていた(図5)。

以上のように、今年も理学部オープンキャンパスは活気の溢れるものであったが、これは運営に関わった多くの方々の献身的な努力の結果である。理学部広報室の横山広美准教授、竹村三和子さん、山本摩利子さん、川口麻実子さんの長期間かけた念入りな準備、紺野鉄二事務部長を中心とした理学部事務部の方々のサポート、情報システムチームの技術的支援、各学科・センターの実行委員の先生方とTAの学生の多大な協力のおかげである。この場を借りて皆様に深く感謝申し上げたい。



図1：理学部1号館の受付で、続々と詰めかける来場者をテキパキさばくTAの学生



図2：生物化学科の展示



図 3：女子中高生のための相談コーナーにて



図 4：小柴ホールで講演する学生の沙川貴大さん



図 5：講演は立ち見も出るほどの盛況ぶり

## 七夕講演会で宇宙を紹介

■ 本原 顕太郎 (天文学教育研究センター 准教授)

岡村 定矩 (天文学教室 教授)

昨年、日本天文学会と天文教育普及研究会は世界天文年の一企画として、全国各地で「全国同時七夕講演会」というイベントを行いました。これはたいへん好評を博し、今年も全国 77 ケ所で講演会が行われました。この企画は、趣旨に賛同する機関がそれぞれ主体的に講演会を行う「ゆるやかなネットワーク型」の新しい試みです。理学系研究科では、ビッグバン宇宙国際研究センターが7月7日に小柴ホールで岡村による講演を、天文学教育研究センターが7月10日に三鷹キャンパスのセンター講義室で本原による講演を行いました。

岡村は「宇宙ってなんだか知っていますか？」という題名で、宇宙の構造や果てがどこまで見えたかなどについて解説

しました。実際に、スケールモデルによる大きさ比較や仮想宇宙旅行のムービーを紹介し、子供さん達も楽しそうに見ていました。参加者は 43 名とやや少なかったものの、講演の後にもたくさんの質問があり、飲み物とスナック、さらには「おみやげ」も用意されていて、聴衆の皆さんには満足していただけたようです。

本原は「世界で一番高い天文台」という題名で、天文センターが南米チリの標高 5640 m の高山に建設し、昨年 6 月にファーストライトを迎えたアタカマ天文台 (TAO) を紹介しました。「七夕らしい天文学の話」を排して、現地の文化や建設時の苦労話に絞り込むという、ある意味挑戦的な試みでしたが、質疑応答も非常に活発で、アンケートの結果を見る限り「珍しい話を聴けた」と好評でした。猛暑真っ盛りの中、駅から遠い三



■ 標高 5640 m の星空とアタカマ天文台 (東京大学 TAO プロジェクト提供)

鷹キャンパスでの開催でしたが、ほぼ会場が埋まる 50 名を超える参加者がありました。

今年も大成功であった「全国同時七夕講演会」の関係者は、この企画をさらに発展させて、同時に同じ分野の講演会を最も多数の場所で行った記録としてギネスブックへの掲載を目指して意気込んでいるようです。



## 南米チリで miniTAO 望遠鏡 完成記念式典を開催

吉井 譲

(天文学教育研究センター 教授)

南米チリ北部アタカマ砂漠、チャナン  
トール山頂（標高 5640 m）に標高世界  
一となる東京大学アタカマ 1 m 望遠鏡  
（miniTAO 望遠鏡）が完成、観測を開始  
したことを記念し、2010 年 7 月 7 日、  
南米チリの首都サンチャゴにて記念式典  
が開催された。

miniTAO 望遠鏡は、天文学教育  
研究センターを中心とした TAO  
（The University of Tokyo Atacama  
Observatory）研究グループが、口径  
6.5 m の大型赤外線望遠鏡に先駆けて、  
2009 年 3 月、チャナントール山頂に建  
設し観測を開始した口径 1 m の赤外線  
望遠鏡である。

式典は、東京大学、チリ科学技術庁、  
チリ外務省エネルギー科学技術局、在チ  
リ日本国大使館の 4 機関合同で開催さ  
れ、日本・チリ両国から約 140 名が出  
席する盛大なものとなった。本学からは  
松本洋一郎副学長、山田興一総長室顧問、  
相原博昭理学系副研究科長はじめ多数の  
教職員が出席したほか、文部科学省、チ  
リ科学技術庁、チリ外務省、在チリ日本  
国大使館、日本企業などから多数の出席  
があった。チリ共和国ピネラ大統領か  
らは TAO 計画を激励する祝辞が寄せら  
れた。

会場となった Club de la Union は、大  
統領府であるモネダ宮殿から歩いて 5



会場となった建物は 1925 年の完成当初から貴族の社交場として使用さ  
れてきたもので、式典は彫刻や絵画の並ぶ大広間にて厳かに行われた。

分の距離にある歴史ある建物であり、そ  
の厳かな雰囲気の中、松本副学長の挨拶  
で式典は幕を開けた。続いて、TAO 計画  
代表である吉井が、miniTAO 望遠鏡建設  
までの道のりと観測成果を紹介、将来の  
口径 6.5 m の大型赤外線望遠鏡の構想  
について説明し、チリの人々の支援と友  
情に対して感謝を述べた。その後、Jose  
Miguel Aguilera チリ科学技術庁長官、  
林渉在チリ日本国大使、磯田文雄文部科  
学省研究振興局長からの祝辞が続き、最  
後は Gabriel Rodriguez チリ外務省エネ  
ルギー科学技術局長の挨拶で式典を締め  
くくった。

続くレセプションパーティは西岡喬三  
菱重工業相談役の乾杯の音頭で始まっ  
た。チリ風にアレンジされた寿司とチリ  
ワインを片手に、望遠鏡立ち上げに至る  
までの思い出話があちこちで聞かれた。  
また式典に先立って開催された望遠鏡サ

イトツアーの参加者からは、過酷な環境  
下で観測する研究者の強い意志に対する  
驚きの声が聞かれた。

式典の前日には松本副学長の講演会が  
カトリカ大学で行われ、式典直前にはチ  
リ郵政局による TAO 計画の記念切手の  
発行式典、翌日には東京大学共催のピア  
ノコンサートがアンドレス・ページョ大  
学で行われ、あたかも東大ウィークのよ  
うであった。これらの行事はチリに東大  
の存在感を示す良い機会となった。

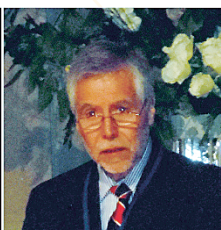
式典の多彩な参加者を見ると、本計画  
が TAO 研究グループのみならず、理学  
系をはじめとする東大の教職員、日智政  
府関係者、日本企業や現地ワーカーなど  
ひじょうに多くの人々の努力によって進  
められてきたことを実感する。地球の裏  
側で困難に挑戦する TAO プロジェクト  
に、これからも変わらぬご理解・ご協力  
を賜りたい。



松本洋一郎  
東大理事・副学長



吉井譲  
東大理学系研究科教授・  
TAO 計画代表



Jose Miguel Aguilera  
チリ科学技術庁長官



林渉  
駐チリ日本国特命全権大使



磯田文雄  
文部科学省研究振興局長



Gabriel Rodriguez  
チリ外務省エネルギー  
科学技術局長

## 学生企画コンテストで優秀賞獲得「東京大学を編集して魅せる！」

横山 広美

(広報・科学コミュニケーション 准教授)

今年度の東京大学学生支援事業、第3回学生企画コンテスト「学生による“タフな学生養成企画”」において、生物科学専攻博士課程2年の菅野康太さん、総合文化研究科広域科学専攻博士3年の飯島和樹さんが提案した「東京大学を編集して魅せる！」がみごと優秀賞を獲得した(今年度入賞は他に佳作が2点)。

菅野さんたちはこれまでのサイエンスコミュニケーションの在り方を考察し、一部の関心層のみならず新しい層に関心をもってもらうための「編集」について提案した。大学や学問を縦糸とし、異分野のつながりを横糸として、出版をはじめイベントやwebを用いた活動を展開することで、大学の知の可視化に臨む。まずは東京大学が130周年記念に

発行した雑誌「アカデミックグループ」の続編を、パターン、カタチ、リズムをテーマに8月に出版し、記念イベントを行う。さらなる続編の作成も目指す。

今後は学問イベントのHPなどを作成することを通じ、若手デザイナーやアーティストの発掘にも力を入れ、映像祭、写真展、学術以外の雑誌などとのタイ

アップも考えていきたいと述べている。

「本来、学術の世界観は魅力的です。それが人々に伝わらないとしたら、見せ方・編集の問題だと思います。総長も編集長のような総長になりたいと仰っていますが、まさにそのような姿勢で学術の魅力を伝えたいと思います。」



■ 優秀賞の賞状をもつ菅野康太さん(右)と飯島和樹さん(左)

## 化学専攻佐藤健太郎特任助教、科学ジャーナリスト賞の受賞おめでとうございます

林 輝幸(化学専攻 特任教授)

本研究科化学専攻の佐藤健太郎特任助教が、近著「医薬品クライシス〜78兆円市場の激震」で、「科学ジャーナリスト賞2010」を受賞されました。心よりお慶び申し上げます。本研究科からは、2007年の横山広美准教授に続く2人目の受賞となります。

佐藤助教は、製薬企業で13年近くにわたって医薬品の合成研究に携わってきました。2007年に退職してサイエンスライターとなり、2009年4月より現職に就いています。その間に化学関連の2

冊の著書を刊行し、本作が3冊目の単著単行本になります。

医薬品業界は、今年2010年をピークとして多くの大型製品が特許切れを起こす「2010年問題」に見舞われています。本書は、これらに代わる医薬品がなぜ出現しなくなったかを、研究者側および社会的な視点の両面から解説したものです。また本書はこれだけではなく、医薬品は体にどのように作用するのか、創薬の過程はどのようなものであるのか、なぜ年間20種以下しか認可されないほど新薬の創出が難しいのか、副作用とは何であるのかといった医薬にまつわる疑問を、自身の経験を交えつつ平易に解説し、研究者のみならず一般層への知識の普及に貢献しました。今回の受賞は、この点

が高く評価されたものです。佐藤助教の、今後の一層のご活躍を祈念いたします。



■ 佐藤健太郎特任助教